



Title	近世浄土宗と蝦夷地 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	宮本, 花恵
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13399号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74556
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Hanae_Miyamoto_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 宮 本 花 恵

学位論文題名 近世浄土宗と蝦夷地

本論文の観点と方法 本論文は、19世紀初頭に東蝦夷地ウス（有珠）場所に幕府の手により「蝦夷三官寺」のひとつとして建立された浄土宗寺院である大臼山道場院善光寺（ウス善光寺）、ならびにその前身である「善光寺如来」が安置された堂庵（善光寺如来堂）において営まれた18世紀～19世紀にかけての宗教活動の特質を、文献史学的手法を用いてなされた研究である。「蝦夷三官寺」とは、ロシアの南下に対応した蝦夷地幕府直轄化と連動し、1802年に東蝦夷地へ新規に建立が決定された三寺院（江戸芝増上寺末ウス善光寺、天台宗江戸上野寛永寺末シャマニ〔様似〕等澍院、臨済宗江戸芝金地院末アツケシ〔厚岸〕国泰寺）を指す。このうちウス善光寺は、その前身に堂庵を有する点、ならびに赴任僧が積極的なアイヌ教化を展開した点が特徴で、注目を集めてきた。

かつて須藤隆仙は『日本仏教の北限』（1966年）において、近世北海道仏教史の課題として、①日本仏教もしくは前近代のいわゆる大乘仏教の最北の展開事例として仏教史的な位置づけをなす必要性、②教学史的に個別僧や個別寺院を対象とした研究蓄積の必要性、③「蝦夷三官寺」の設置運営と幕府の政策との連関を意識した研究の必要性、を提起した。その後の当該研究領域においては、③をテーマとした仕事が重ねられ深められてきている。これに対し本論文は、②に主眼を置き、近年の近世宗教社会史研究や近世浄土宗史研究の手法を意識しつつ、ウス善光寺でみられた信仰や実践された「教化」の特質につき、北海道仏教史研究の観点から叙述されている。

具体的には、ウス善光寺を軸とした個別僧・個別寺院の実証的事例研究が展開されている。検討対象としては、浄土宗陸奥国津軽今別本覚寺5世貞伝、同陸奥国相馬興仁寺3世宝洲、同東蝦夷地ウス善光寺2世鸞洲・3世弁瑞・同役僧弁瑞弟子唯念・同役僧大基、鸞洲弟子伝通院学頭福田行誠（のち浄土宗管長）らが対象とされた。なお、これらウス善光寺と関わりの深い浄土宗僧侶の教学的な背景に浄土宗戒律復興運動を位置付け、それを担った霊潭・無能ら奥州に活動を広げた興律派僧と上記僧侶との法統上の系譜を丹念に精査するとともに、鸞洲や唯念と徳本ら捨世派僧との法統を含む深い関係性を論じており、近世浄土宗史の観点からの成果ともなっている。

本論文の内容 序章では、近世浄土宗僧侶の教化活動が蝦夷地へ及んだ経緯を、近世宗教社会史研究や北海道仏教史研究、とりわけ「蝦夷三官寺研究」に関する研究蓄積を踏まえ考察するという、本論文の研究視角が示された。第一章では、相馬興仁寺ならびに律院とされた同桑折無能寺を拠点とした近世浄土律（興律派）の奥州への「北進」の意義が検討されている。とりわけ、興仁寺3世宝洲が、奥羽の律僧の事績を、その著「東域念仏利益伝」出版によって流布させた点に注目し、蝦夷地との深いつながりを有した今別本覚寺貞伝の伝記を手掛けた背景を論じた。

第二章では、今別本覚寺5世貞伝の事績と蝦夷地との関連が、個別具体的に論じられている。貞伝信仰の蝦夷地への波及の意義を、作仏の流布や龍神信仰（海上安全）との「習合」の側面を含め再確認し、19世紀以前における仏教に基づいた信仰伝播のすがたの一端を論ずることに成功している。そのうえで、しかし貞伝渡道説を説得的に否定した。第三章では、東蝦夷地ウス善光寺如来堂の三官寺再編以前の信仰実態を論じたうえで、三官寺再編後におもに鸞洲がおこなった布教につき、徳本による念仏布教実践の影響を視座に入れ、再評価を試みた。さらに、刊行略縁起を手掛かりに、三官寺再編後に浄土宗教団がウスを霊場として整備したことの意義を考察した。

第四章では、善光寺2世鸞洲の教団内部での僧位・僧官の昇階に焦点があてられた。ウス赴任以前に既に学僧としての地位を確立しており、退院後には当時高名を博していた紀州の捨世派念仏僧徳本の江戸招致や徳本への一橋徳川家による帰依に深くかわり、さらに異例の出世（京都

知恩院門跡院家)を遂げるなど、蝦夷三官寺住職経験者の教団内部の地位や律僧としての宗教活動に焦点を当て、考察を加えた。第五章では、鸞洲が知恩院門跡院家に就任したことの意義についての考察がなされた。院家就任の経緯については、徳本招致を通じて構築された一橋徳川家との親和性や、蝦夷三官寺住職としての幕府との親和性が指摘された。また、院家就任により、当時門跡であった尊超法親王を通じ有栖川宮家との関係が生じ、その関係を梶子に京都における浄土律院である聖臨院を再興するといった、律僧としての鸞洲の活動が示された。

第六章では、ウス善光寺役僧を勤めた唯念(3世弁瑞弟子でもある)の退院後の事績が検討された。鸞洲の出世とは対照的に、捨世派念仏僧として駿河国富士山麓の在地社会で活動した唯念の事跡が取り上げられた。そのうえで、唯念の富士山麓での念仏活動の背景に、ウス善光寺赴任時に経験した従来山岳信仰の対象としてあった有珠山を弁瑞がさらに登拝対象として整備したことや、有珠山噴火に際会しての念仏回向の実践等があったことが指摘された。

第七章では、幕末に松浦武四郎が著した「東蝦夷日誌」(板本、文久3年序)に載せられる鸞洲の事績の評価をめぐり、個別実証的な考察がなされた。福田行誠による情報提供という経路を実証し、行誠・武四郎双方の同時代的意図がそこから読み取られた。行誠にとっては、当時計画を進めていた江戸での浄土律院開創に資する先行事例として、武四郎にとっては自身の理想とした対蝦夷地(アイヌ)政策の先駆者として、それぞれウスにおける鸞洲の事績を取り上げ、潤色を交えつつ強調した、というのである。

終章では、本研究で論じられた論点が整理されたうえで、蝦夷三官寺創建時の箱館奉行が浄土宗檀家であったことの意義や、ウス場所をはじめ東西蝦夷地地域で確認される「アイヌの宗教世界」と「神道・仏教が混交した和人の信仰」とが「共存」した状況それ自身の特質を考えるうえで、千島列島に進出したロシアが携えたキリスト教(ハリストス正教会)の及んだ「異国境」方面における同時代の宗教的な状況を比較史的に考察していくことの意義、といった課題が示された。

なお、本論文には史料編が付されており、七点の史料が収められている。いずれも本研究の内容と密接に関わる重要史料の全文翻刻と解題で、当該研究分野の基礎史料として汎用性のある仕事となっている。